46
2021.4

放送番組センターレポート

BROADCAST PROGRAMMING CENTER OF JAPAN Report

公益財団法人　放送番組センター
〒231-0021 横浜市中区日本大通 11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110　https://www.bpcj.or.jp/

番組上映会・公開セミナー「ぽんぽこ物語」

日本初の連続国産テレビ映画『ぽんぽこ物語』（放送/ラジオ東京テレビ=現TBSテレビ、制作/東京テレビ映画=現TBSスパークル）を取り上げ、「番組を視聴する会」第11回（12月15日～1月24日）と、公開セミナー「『ぽんぽこ物語』に見るTBSドラマのDNA」（12月19日・1月16日）を開催した。

『ぽんぽこ物語』は 1957 年 11 月 11 日から翌年 2 月 22 日まで放送された、日本初の連続国産テレビ映画である。生放送が当たり前の時代に、ラジオ東京テレビが、まだどの放送局も挑んだことのないテレビ映画の制作に乗り出し、月～土の帯ドラマとして全 73 話を放送した。しかし、放送後フィルムが行方不明となるなど、様々な事情が重なり、“幻の元祖テレビ映画”と言われていた。2018 年、61 年ぶりにフィルム原盤が発見され、修復作業を経て、2020 年、状態の良い 12 話が DVD 化された。

物語は、人間に生まれ変わった子だぬきの兄妹が、離れ離れになりながらも冒険の末に再会を果たす時代活劇である。（主演：小鳩くるみ、脚本：川内康範）

上映会では、DVD 化された 12 本に、初公開となる DVD 未収録の 39 本を加えた計 51 本を上映した。

2 回にわたるセミナーには、司会にテレビアナリストの吉田正和氏、解説に多くの名作ドラマを生み出してきたテレビプロデューサーの市川哲夫氏（第 1・2 回 / 元 TBS）、ゲストに番組発掘全般を担った小島英人氏（第 1 回 /TBS ヴィンテージクラシックス）、フィルム修復担当の西村寿生氏（第 2 回 /TBS スパークル）、数々のドラマ美術を手がけてきた永田周太郎氏（第 2 回 /TBS）を迎えた。

第 1 回「『ぽんぽこ物語』がテレビ黎明期に残したもの」では、本作が誕生した時代背景や放送史における意味を解説した。市川氏は「『ぽんぽこ物語』には、ホームドラマ、ミュージカル、コメディなど、その後のドラマのあらゆる要素が見て取れる」と評した。この作品以降、数々の名作ドラマが生まれ、『ドラマの TBS』が確立していった。また小島氏は、「大ヒットした『半沢直樹』はコロナ禍という悪条件下で頑張って制作した。『ぽんぽこ物語』も、お金もノウハウもない条件下で無我夢中で作ったドラマ。その DNA が今に受け継がれている」と語った。

第 2 回「『ぽんぽこ物語』の面白さ、今に受け継がれたもの」では、フィルム修復やドラマの美術について解説した。西村氏は、腐敗の激しい音声フィルムについて「元の音が分からないので、ゼロから作ったに等しい」と振り返った。永田氏は「やらなくてもいい部分までこだわる、少しでも良い物を作ろうというクリエーターたちの気持ちは、今も変わっていない」と語った。

各回には、兄のぽん吉役の栗原眞一氏（第 1 回）と、川内康範氏ご子息の飯沼春樹氏（第 2 回）が来場し、作品への想いを語った。第 2 回の最後に、小島氏が「本作は誰も見たことがなかった“過去からの新作”である」と締めくくった。来場者からは、「制作者の情熱に感動した」など、映像発掘への感謝の声が寄せられた。

2 回のセミナーの様子は、放送ライブラリー公式 YouTube チャンネルで、ノーカットで公開されている。

■公開セミナー 第50回　名作の舞台裏
『NHKスペシャル　未解決事件』

3月7日、テレビドラマの制作者や出演者が自らの番組を振り返る公開セミナー「名作の舞台裏」を、関内ホール（横浜市中区）で開催した。今回は、2011年からNHKで放送されている『未解決事件』シリーズより、地下鉄サリン事件の10日後に発生した警察庁長官狙撃事件を実録ドラマ化した『File.07 警察庁長官狙撃事件　容疑者Nと刑事の15年（2018）』を取り上げた。

【ゲスト】國村　隼（出演）、
イッセー尾形（出演）
中村直文（制作）、
黒崎　博（脚本・演出）
【司　会】渡辺紘史（放送人の会）

開催当日は緊急事態宣言下であったが、検温や参加票への記入等、万全の感染症対策を施した上で開催した。

今回取り上げた『NHK スペシャル未解決事件』は、日本中に衝撃を与えた事件をドキュメンタリーと実録ドラマの双方から徹底検証し、未来への教訓を探る大型シリーズである。

シリーズがスタートしたきっかけについて、報道局の中村氏は「記者が“夜討ち朝駆け”で聞き出した情報メモのうち、実際にニュースとして報道されるのはごく一部だが、膨大なメモの中に捨てがたい事件の様相が含まれている。それらを折り込んだものを作りたいと思ったのが始まり。メモを材料に、ドキュメンタリーとドラマ双方の力を利用して、複雑な事件を描けないかと考えた」と振り返った。

2011 年から始まったこのシリーズは年 1 本制作されているが、中でも今回取り上げた“File.07”のドラマはシリーズの新境地を開いた作品と言われている。渡辺氏は「シリーズ当初は、映像で説明するために報道を一部ドラマで見せているという感じがあったが、この作品はドラマとドキュメンタリーの両面から真実を掴んでいる」と評し、中村氏も「一つの到達点の作品」と述べた。

“File.07”には、数々の秀作ドラマを手掛けてきた黒崎氏が加わった。黒崎氏は「自分は普段、フィクションであるドラマを作る仕事をしているが、中村さんと話しているうちに、事件現場に携わる人々の無念さや執念の積み重なりを感じ、それを一つの番組にできないかと強く思うようになった」という。また、“事実”で構成された現実の世界をドラマで描くために、「取調室にカメラを設置できたら、大事なものが見えてくるのではないかと考えた」と振り返った。執念の捜査で犯人を追っていく刑事（原）を國村氏、真犯人と自ら名乗る男（中村）をイッセー氏が演じたが、キャスティングの時期を尋ねられると、「脚本を 1 行も書いてない段階で、國村さんとイッセーさんに連絡した」と答えた。

原と中村が初めて会う取調べのシーンは、黒崎氏が「基本の流れやセリフは台本に書いてあるのに、次に中村が何を話すのか全く分からない、予測できない芝居になっている。原刑事のリアクションも予測できず、不思議な感覚があった」と語ると、渡辺氏が「計算を超えた二人の関係の化学変化が起きていたのではないか」と指摘した。國村氏は、イッセー氏が取調室に入った瞬間、本物の中村と対面したかのような印象を受けたと話した。さらに「中村が何をしてくるのか、ずっと佇まいを観察していた。彼は、台本で読んで知っているような、予定調和として何かをすることは全くない。とんでもない中村がそこに出てくる。だんだん、一個人としてイッセーさん劇場の観客になっていった」と明かした。

かたやイッセー氏は「『ちゃんと芝居しろよ』と國村さんが怒りだすのではないかと思った」と笑い、演者も予想できない芝居の応酬に「大体こんな芝居をすれば良いと掴める作品もあるが、この作品は 1 センチずつ詰めていかないと分からなかった」と苦労を語った。

机が壁に接している取調室のセットは、本物の刑事に話を聞き警視庁の取調室を再現した。黒崎氏は「美術のセオリーに反したセット。背景が壁だけだと映像がつまらなくなることが多いが、この作品は二人の緊張感があるから成立し、ずっと見ていられる」と演者の力を賞賛した。

中村が犯行を自白するシーンに話が

移ると、黒崎氏が「撮っていて一番楽しかったシーンの一つ」と語った。取調室での出来事ながら、中村がスタジオで犯行時の様子を実演する映像と、犯行当日の回想映像が混ざりつつ進行する。演出の意図について黒崎氏が「『NHK スペシャル』なので事実をベースにすべきだが、中村の脳内では取調室を飛び出し、様々な場所へ自由に行っている。そのイメージを表現しようと挑戦した」と説明すると、共に議論を重ねた中村氏は「中村という、捉えどころのない人物像を描くという意味ではフィクショナルだが、ある意味彼のリアリティーを表している」と評した。

渡辺氏は、中村と原が最後にアクリル板越しに面会するシーンを絶賛した。そのシーンとは、＜中村「9 個の嘘に一つの真実があればそれで十分」原「あんたにあるのか、その真実が」という会話の後、中村が部屋を出て行き、カメラが原の顔に切り替わることなくアクリル板に映った原の顔だけが残る＞というもの。黒崎氏は「カメラや照明スタッフは、アクリル板を狙って撮っていた。この映像が撮れてしまったことで、このワンカットで終わるしかないという宿命的なものを感じた」と説明した。

実在の人物を演じる際の役作りについて問われると、イッセー氏は「顔・形・リズムと、口調は外せない」と話し、中村については、顔写真や肉声を基に「顔とだらだらした口調と体幹、この三つを大事にして國村さんと対峙した」と語った。一方國村氏は「演じる人物の大方のイメージが観客の中にある場合、そこは外せないが、縛られたくはない。観客に違和感が無いなら、自分でイメージしたキャラクターを作品の中に立ち上げたい」としながらも、「実在の人物は演じにくいので、本当はやりたくない」と明かした。原刑事本人に会った際、一見、敏腕刑事とは分からないという印象を受けたという。そのため「脚本の中の原刑事を、自分の中で具体的にイメージすることしか糸口がなかった。イッセーさんと絡んで初めて、役が立ち上がってくるのではないかと思っていた」と語った。

ドラマとドキュメンタリーの枠の超越について、黒崎氏は「供述調書から、刑事と容疑者の間にある種の信頼関係が生まれたという印象を受けたが、実際の撮影を通じて國村さんとイッセーさんの間にも信頼関係ができたように感じた。二人の芝居合戦は、撮り逃がしたら二度と再現できない、ドキュメンタリーの現場でカメラを回しているような緊張感があった」と振り返った。國村氏も「イッセーさんとの芝居と、原刑事と中村の取調べというシチュエーションが微妙にオーバーラップしていった」、イッセー氏は「ドキュメンタリーとドラマを超えるものを目指している印象を受けた」と語った。

終了後、見応えのある作品の鑑賞と出演者やスタッフの話を堪能した参加者からは「演技のレベルを超えた、二人のドキュメントを見た」「二人だからこそ成り立つ映像だと強く感じた」という声が寄せられた。

■番組を視聴する会、「3.11」特集

3 月 9 日～ 21 日、番組を視聴する会第 12 回を開催した。東日本大震災の発生から 10 年を迎えることから、「震災を伝える・記録する・考える 2021　～地元を元気に！　祭りと笑顔と音楽と～」と題し、岩手・宮城・福島の放送局が、震災後、地元に元気や笑顔を取り戻そうと取り組む人々を取材・制作した番組を紹介した。また、情報の発信者でもあるミュージシャンたちが、放送や番組を通して震災とどのように向き合ったのかについても振り返った。緊急事態宣言が 3 月 21 日まで延長された中、119 人が来場した。番組は次のとおり。

『今夜も生でさだまさし　がんばらんば！日本』(2011／NHK)、『ダイドードリンコスペシャル　よみがえれ！海のまち　～復興への願い・塩竈みなと祭～』(2011／東日本放送)、『山下達郎の TSUTAYA サンデー・ソングブック』(2012／エフエム東京)、『風とロック沖縄　LIVE 福島　CARAVAN 日本』(2013／福島中央テレビ)、『ふくしまっ子 10 万人笑顔プロジェクト笑顔のチカラ』(2014／福島放送)、『キラリ☆ふくしま　歌声をひとつに　～ MJC アンサンブル 1050 日の記録～』(2014／テレビユー福島)、『ミヤギテレビ報道特別番組　いつも心に青空を我ら社会人応援団』(2014／宮城テレビ)、『スーパーニューススペシャル 僕のミライ　～青い鯉のぼり・健人の夏～』(2014／仙台放送)、『ピアノで紡ぐ三陸の春　～西村由紀江とともに～』(2016／テレビ岩手)、『日本のチカラ　結婚しようよ　石巻ウェディング物語』(2017／東北放送)。

■第２回理事会を開催

２月26日にオンライン形式で開催した第２回理事会で、令和３年度事業計画・収支予算を承認した。概要は以下の通り。

◇「公開番組の一層の増加」「事業の全国展開」「放送事業者の理解・協力の推進」を重点項目として、新型コロナウイルスの感染状況や社会情勢を見極めながら、新たな環境下で着実に事業に取り組んでいく。

◇現行の事業方針の成果を検証した上で次期事業方針の検討を進める。

◇放送事業者と連携し、保存対象番組の収集と公開を一層推進する。

◇サテライト・ライブラリーならびに大学等教育機関における公開番組の利活用の利用促進に努める。

◇社会状況に合わせた規模、場所、方法で展示会や公開セミナー、番組上映会を開催する。

◇収支予算は経常収益3億6,426万円、経常費用4億0,605万円を計上する。

■放送番組収集諮問委員会を開催

３月23日、第29回（令和２年度）放送番組収集諮問委員会をオンライン形式で開催した。議題は以下の報告事項６項目。

1.「放送番組収集基準」の適用状況
2. 番組の収集・保存・公開状況
3. サテライト・ライブラリーおよび大学等教育機関での利用状況
4. 令和３年度事業計画、収支予算
5. ジャパンサーチへの連携状況
6. 番組視聴システムの更新

委員からは「番組の収集や公開、全国展開に対して、広報面からもより積極的な姿勢で臨んでほしい」「コロナウイルスの感染拡大は歴史的出来事である。ニュースや報道などの番組を、どのように記録・収集・保存・公開していくかは、センターの今後の課題である」「4K・8K番組の収集は、設備面で負担はかかるが検討してほしい」「大学での利活用について、SARTRASの活用の検討も継続してほしい」等の意見や提言があった。

■教育機関での番組利活用

【広島大学】

令和２年度後期、教養教育の「日本国憲法」（畑浩人講師）の在宅授業で、『NNNドキュメント'07　声の壁　発言できない議員』（2007／中京テレビ放送）が利用された。

■サテライト･ライブラリーの運用

【香川県立図書館】

２月２日より、香川県に関するテレビ番組27本の視聴が開始された。

【オーテピア高知図書館】

３月20日より、高知県に関するテレビ番組18本の視聴が開始された。

【番組上映会とセミナーでの利活用】

３月27日､市川森一脚本賞財団主催、放送番組センター共催の「テレビドラマの巨人たち～人間を描き続けた脚本家第４回『田向正健　ひと、凛として　時代を生きる』」が千代田放送会館で開催され、田向正健脚本作４本をストリーミング送信し、上映した。上映後には、出演者や制作者によるシンポジウムを行った。

■ 2020.12 ～ 2021.2 の新公開番組

【テレビ番組】

『伊能嘉矩生誕150年　KANORI
台湾原住民を愛した遠野の人類学者』
2017.07.23／岩手めんこいテレビ

『SBSスペシャル　おひさま家族
～色素性乾皮症を抱えて～』
2017.05.05／静岡放送

『13億人の深層　天空の教室
～中国四川省・標高3000mの希望～』
2009.12.31／テレビ大阪

『テレメンタリー2018　検証　西日本豪雨
〔1〕道は濁流になった』
2018.09.04／広島ホームテレビ

【ラジオ番組】

『青春アドベンチャー　逢沢りく〔1〕～〔10〕』
2016.05.02～13／NHK

『RKB報道スペシャル　“魔法の素材”が
舞う　～プラスチック大気汚染～』
2020.05.31／ＲＫＢ毎日放送

など、テレビ129本、ラジオ46本。

新公開番組 PICK UP!

山懐に抱かれて

2018.11.21／テレビ岩手
ディレクター・プロデューサー：遠藤　隆

岩手県の山村で山を切り開き、「山地（やまち）酪農」に取り組んできた吉塚さん一家を1994年から24年にわたり長期取材し、その記録をまとめたドキュメンタリー。放送ライブラリーでは、2001年、2006年、2010年当時の吉塚家を記録した関連番組も公開している。

９人家族の主である父・吉塚公雄さんは千葉県の出身。東京農業大学在学中に、１年を通して山に牛を放ち、自然に近い環境で育てる「山地酪農」に感銘を受け、岩手に移り住んだ。経営が厳しくても、信念を貫く頑固親父だ。生活は苦しいが子どもたちは皆明るく、仕事や家事を手伝ってきた。24年間の中で、プライベートブランド牛乳の生産に挑戦する公雄さんや、成長した子どもたちとの対立、やがて父の後を追い牧場を手伝っていた子どもたちが経営を担うようになり、孫たちもまた牛を追う…という、３世代の姿を収めてきた。一家に寄り添った長期にわたる取材は、ローカル局ならではの取り組みと言える。

一家の歴史は、テレビ岩手開局50周年を記念して、2019年４月に映画『山懐に抱かれて（103分）』として公開された。モノに溢れ、家族の形が多様化する現代。一家で食卓を囲み自然と共に生活する家族の姿が、岩手を飛び出し全国の観客のもとへ届き、共感の波を静かに広げている。

◆放送ライブラリー公開番組数
テレビ番組17,688本／ラジオ番組4,727本／テレビ・ラジオCM 11,961本／劇場用ニュース映画2,683項目　（2021.3.31現在）